



私が日吉村国保診療所(現鬼北町国保日吉診療所)へ赴任したのは、一九九九年四月のことでした。県内でも数少なくなっていた、一人医師の有床診療所でした。それから四年二月勤務し、二〇〇三年六月に現職の県立中央病院へ転動しています。しかし転動後も、毎週一回のへき地医療支援代診として、今もこの診療所へ通っています。

「ほぼ」無休状態

旧日吉村は、人口約二千人、過疎化と高齢化が著しい山間へき地です。赴任当時は開業医が診療していましたが、体調がすぐれず休みがちでした。私は「ほぼ」村内唯一の医師として、保育園の園医・小中高校の

すぎやま けいそう
杉山 圭三 14期生、1991年卒

一人医師の有床診療所だった旧日吉村の国民健康保険診療所



愛媛県立中央病院

【私の勤務地】県立中央病院は、県都松山市の中心部近くに立地し、愛媛県の中核となる864床の総合病院。「愛媛県へき地医療支援機構」を設置しており、総合診療部にへき地医療支援機構専任担当者2人が所属している。

学校医・特別養護老人ホームの患者を抱えて、「ほぼ」無休の勤務状態でした。そういえば、自洽医大からのアンケートがあり、「年間の休暇は何日か

今も地域医療が「本職」

？」の問いに、「三日」と「まじめ」に回答した記憶があります。

赴任当時は公的な代診の仕組みもなく、研修や学会へ出ることもほとんどできず、ただ、ひたすらに勤務していました。「自分が一日休むためには、代診費で数万円かかるからなあ」という思いが強かったので。その間、家族にも相当の負担を強いていたと思います。ある朝、出勤の際に娘に言われました。「おとーしゃん、また来てね!」。涙が出そうになりました。

誰かがやらねば

ただくこともたくさんありました。地域医療の真実が、そこにはあったと思います。

私が日吉村の診療所を退職したのは、愛媛のへき地医療支援の責務を担うためでした。私自身が当時の最寄りの県立病院から、月二回の土日当直代診をしていただいたのが、愛媛のへき地診療所支援の始まりでした。誰かがやらなければならぬ仕事だと思っていましたので、先輩からの誘いもあって現職へ異動したのです。

しかし退職にあたり、職員から言われた一言が深く心に突き刺さりました。「先生は私たちを見捨てるんですか?」。決してそうではありませんでした。私の心には重く強く響きました。それから四年半以上が過ぎ、私は今もへき地医療・地域医療を「本職」と思いながら、県立中央病院総合診療部で愛媛県へき地医療支援機構専任担当として勤務しています。

(次回予定は鳥取県)